からこかぎ

第１０号　平成２７年５月１日（水）発行

唐古･鍵遺跡の保存と活用を支援する会
〒 636-0247　奈良県磯城郡田原本町阪手 233-1　青垣生涯学習センター唐古･鍵考古学ミュージアム内
℡ 090-9257-3688　Email：karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp

就任のごあいさつ

会長　今西　和代

新たにご選任いただきました運営委員を代表して、ご挨拶をさせていただきます。

おかげさまで、１１年目を迎えました「唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会」も無事に船出をいたしました。これからも活動計画にお示ししましたように、学校支援、ものつくり教室及び弥生ウォークの三つの重点事業を中心に着実に活動を実行したいと考えております。
少し、本年度の重点事業についてお話いたします。

総合学習支援につきましては、本会のコア事業でございますので、確実に進めていきたいと考えています。先ほどの活動報告にありましたように会員の皆さんの参加の数も年々増加しており、大変ありがたいことと思っています。何よりも子供たちの土器作りなどの笑顔を大事に進めていきたいと思っています。

また、ものつくり教室ですが、土器、石器つくりなどの例年のメニューに加え今年は青銅器の溶融実験に取り組んでおります。最終的には鋳型の製作から流し込みまでこぎつけたいと計画しています。このような実験考古学を通じ新しい発見が生まれてくることを期待しています。

また、弥生ウォークですが、既に１３回も弥生遺跡の探訪を続けております。１回に付き10箇所程度の弥生遺跡を訪れていますのでかなりの遺跡の数となっています。昨年度は、沖積地の唐古・鍵遺跡と異なる扇状地と低丘陵地の弥生遺跡を訪れ、沖積地の弥生遺跡との違いが分ってきました。今年は、「人・もの・情報」といった流通ルートに着目して実施したいと考えています。是非、ご期待ください。

さて、１０年を経過した私どもの会を改めて考えてみました。私たちの会は、二つの強みを持っていることが分かります。

一つは、多方面で活躍された会員がそれぞれ異なったノウハウを持って参加している点です。それぞれの方は、企業や学校教育や役所さらには子育てなどの永年の経験をお持ちです。また、技術のノウハウや考古学に関心を持ち続けた方々が多くいらっしゃいます。それが、多様な知恵を生み出していると思っています。

更に、もう一つの強みは、そのノウハウが十分に発揮できるような和やかな人間関係を持っていることです。私どもの活動は、楽しい時間の中で過ごしております。

私たちは、二つの長所を大事にして、引き続き会の運営にあたって行きたいと考えております。今後とも、引き続き、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

本日は、ありがとうございました。新役員を代表してのご挨拶とさせていただきます。

（平成27年度定期総会での就任挨拶より。）

富雄川流域の弥生遺跡　を歩いて

大森初美

3月28日に開催された第13回の弥生ウォークは、天候にも恵まれ前回の佐保川よりさらに西に流れる富雄川に沿って弥生遺跡を訪ねました。案内の井上さんから「資料の地形一覧表」（別図１）を基に訪れる遺跡の説明がありました。今回の遺跡は、扇状地と丘陵に位置し、住居遺構が多く検出しているので、①地形と遺跡の関連②集落遺構の特徴③地域の集落動向を確認して欲しいということでした。

(1)　最初に訪れたのは商業施設アピタでした。普段利用しているお店が田中垣内（たなかがいと）遺跡と知らされてビックリしました。店内にある遺物の展示コーナーで、遺跡の概要の説明を聞いて更に驚きました。弥生後期の長径67ｍの環濠がほぼ完掘されていて、幅が広い部分で1.7m、深さ40～60ｃｍと以外に小規模の環濠に、その内部に20棟の竪穴住居址があり、さらに環濠西側には、溜井（灌漑施設）や水溜状遺構（貯水施設）を付属した溝の存在から生産域が想定されていました。環濠は、唐古・鍵遺跡と異なった様相で、集落内の排水と灌漑用水機能が想定され、防御性は意識されていないと思いました。これが環濠の典型ではないかと思いました。

次に訪れた古屋敷遺跡と万願寺遺跡は、田中垣内遺跡と意外に近くにあり、何れも扇状地形（60m標高）に属し、弥生中期から後期の遺構が検出されていました。前回訪問した佐保川流域の扇状地にある治道遺跡や美濃庄遺跡、若槻・稗田遺跡と同様の中期以降の遺跡であることがわかりました。ただ、縄文晩期と弥生前期の遺物も出土しており、前回の八条遺跡や八条北遺跡との類似点もありました。

(2)　次の西田中遺跡からのコースは、丘陵地形に属し緩やかな傾斜地に弥生中期から終末期の住居址が検出された遺跡が多くありました。西田中遺跡は、中期から後期にかけて20棟の住居址が検出され、その数にもビックリしましたが、炉跡から外部に溝が延びており沖積地に無い遺構に驚きました。西日本の低丘陵性住居にみられ、湿気対策と想定されているとの説明でした。

それから訪れた慈光院裏山遺跡、小泉遺跡、菩提山（ぼだいせん）遺跡、三井岡原遺跡は、中期から後期段階の住居址が検出され、何れも平面プランの変遷の良くわかる集落遺構で、円形→隅丸方形→方形という推移でした。縄文時代から弥生時代にかけては円形や方形住居は並存し、弥生後期になると方形住居の比率が増加して、古墳時代前期後半には方形住居に統合されるとのこと。その方形住居への転換が早いのが北部九州という説明でした。

私は、菩提山遺跡で、集落の人口について質問しました。その答えは、西田中遺跡を含めても集落の構成員は血縁集団と想定され、同時存在するのは１、２棟で多くても10人程度とのことでした。

(3)　最後に、三井岡原遺跡で、後期段階の地域動向の説明がありました。藤田先生からは、唐古・鍵遺跡と異なり遺物量が少ないとの感想をいただきました。それは、血縁集団のみの構成だとの先ほどの説明と符号すると思いました。

今回の弥生ウォークは、盆地北部では弥生中期から後期段階に至っても、血縁家族を中心とした小規模の集落遺構が散在し終末期には遺跡数が増加していることが分りました。それは、奈良盆地南部では唐古・鍵遺跡等の拠点集落が並存し、集落の集住形態が後期まで持続する様相とは明らかに違っているように思えました。その違いは、沖積地形に位置する拠点集落を中心とした社会と、扇状地（低丘陵）にあった小規模集落が並立した縄文期から持続する「氏族社会」の違いと理解しました。

次回以降は、流通ルートに着目して弥生をウォークするとか、楽しみにしています。

遺物紹介（５） ― 出土人骨

会報編集メンバー

今回は、第１室に展示されている第 23 次調査で出土した２体の人骨を紹介します。

第 23 次調査は、唐古池東側堤防沿いに樋門を境に南側（70m幅 2・5m）、北側（18m幅 1.5～2m）の延長 100mの調査でした。昭和 60 年～61 年の厳寒の中の調査だったとのことです。

第 23 次調査では、人骨の出土がよく知られていますが、畿内第Ⅳ式期の北方砂層（幅 8m、深さ 1.6m以上）に加え遺物も布製品、巴形銅器、銅鐸形土製品、卜骨、石棒、搬入土器等は重要といえます。順次、遺物紹介のコーナーでご説明したいと思っています。

(1) 第 23 次調査報告書によると、１号木棺墓人骨は、南側調査の中央部付近から側板を据え小口板の代わりに棒で２枚を支え、底板の代わりに樹皮状の植物繊維を敷いたうえから出土し、埋葬状態は仰臥伸展葬とのことです。

留意したいのは、縄文期の屈葬と異なる伸展葬に加え、土壙墓や土器棺墓でないことです。当時の朝鮮半島の葬送は、支石墓が主流でした。支石墓は、４枚の板石(北方式)や碁石のような丸石(南方式)に蓋石をのせてある墓ですが、その下部の埋葬遺構は、木棺墓や石棺墓が多く見られます。因みに、西北九州に残っている支石墓の下部遺構は、土壙墓を中心として木棺墓、石棺墓、甕棺墓と多様です。糸島市新町支石墓の人骨は、土壙墓に加え、縄文的形質を有し膝を屈した人骨(抜歯あり)です。このように、墓制は、極めて保守的な色彩を有す文化要素ですので、１号木棺墓人骨が朝鮮半島の墓制をいち早く採用しているということは重視されます。

また、身長が 162ｃｍあり、縄文期の男性の平均身長が 159ｃｍに比べて高身長ということです。付―２をみると、北部九州の人骨に多い左前腕が軽く内側に屈曲されているのが分ります。

一方、東京大学人類学教室の植原和郎教授の鑑定報告によると四肢骨が太く頑丈とのことです。これは、縄文期の人骨の特徴です。さらに、縄文人骨に比較的多く見られる脛骨が扁平（生活条件の厳しさの反映）とのことで縄文的特徴を濃厚に示しているとされています。

年齢は、歯の磨耗度から 20 代後半か 30 台前半と推測されています。

2 号木棺墓人骨は、頭蓋骨と大腿骨のみの出土ですが仰臥伸展葬の男性です。１号よりは頑丈でなく、20 歳前後とされています。１号墓から北に 60ｃｍの近距離に埋葬されています。

いずれの墓坑からも副葬品や供献土器の出土がなく、その点は奈良盆地内の縄文期の葬送形態を持続しています。

2 体の関係ですが、急性の疾患による同時死亡の可能性が高く、相当に良い体格という類似点を根拠に兄弟か従兄弟関係とされています。また、接近した墓坑の位置から血縁関係を重視するキョウダイ原理の葬送といえます。

(2) 過去には、山口県土井ヶ浜遺跡の弥生前期末～中期の 200 体近い人骨の分析から、高身長や長頭等の朝鮮半島系の形質を有している点を根拠に「韓半島から渡来した男性を中心とした人々」が主体となって弥生文化を形成したと解釈されていました。

一方、ミュージアムの展示説明では、渡来系人骨は前期末の資料が大半であり弥生時代の開始年代とは齟齬があるとして渡来人主体説に疑問を呈しています。最近の京奈和自動車道の発掘で縄文晩期の遺構の上に弥生前期の水田址を含め多くの遺構が検出されており、在地の縄文の人々が、伝来した弥生文化を主体的に受け入れたと評価されており、ミュージアムの説明を裏付けています。その観点で唐古・鍵遺跡の 2 体の人骨をみると、伝来した弥生文化を濃密に受け入れていることがわかります。

遺跡紹介（６）

萩之本遺跡～弥生前期の水田址

会報編集メンバー

奈良県の弥生時代の水田遺構は、京奈和自動車道（御所区間）の建設に伴う発掘調査で多く検出されました。御所市玉手地区、同市蛇穴地区、今出遺跡、秋津遺跡、中西遺跡及び橿原市萩之本遺跡などです。その中でも玉手地区、秋津遺跡、中西遺跡、萩之本遺跡では、弥生時代前期の水田遺構が確認されています。

今回は、萩之本遺跡を紹介します。

萩之本遺跡は、橿原市の南西部の川西町、一町にあり、現況標高６９～７２ｍの緩傾斜の扇状地端部に位置しています。その周囲には、縄文時代の晩期の遺跡が多く点在し、橿原遺跡、曲川遺跡、観音寺本間遺跡、玉手遺跡等があります。また、弥生時代になると、一町遺跡、四分遺跡、中曽司遺跡、鴨都波遺跡等の拠点集落があります。特に、一町遺跡は指呼の距離にあります。北に 400mの距離にある川西根成柿遺跡は、弥生前期の環濠集落ですが萩之本遺跡の居住域と考えられています。

調査範囲は、南北１ｋｍにおよび現行の地割りに沿って分割調査（9 区間）されました。北は集落域、南は生産域と想定されています。何れも微高地ですが、縄文期の複数の流路が縄文後晩期には埋没し安定的な地盤形成が進行した後に営まれた遺跡です。

北よりの微高地（1～3 区）は、縄文中期以前の流路が形成したものですが、川西根成柿遺跡を含め弥生前期の大規模な集落域が想定されています。集落縁辺部の 3 区からは弥生前期土器のみならず縄文後期後半の磨耗があまり見られない土器や石器がまとまって出土しています。また、木棺墓や土坑墓も検出されており縄文晩期の集落が想定されています。

因みに、3 区の南半部から 5 区は、低湿地で遺構は検出されていませんが、4 区では、縄文期から弥生期にかけた流路が複数検出され、その堆積物の放射性炭素測定結果は、813ＢＣ-551ＢＣを示し縄文晩期後半～弥生前期までに埋没したことを示しています。

南側の微高地では、前期の水田が 2 箇所で検出されています。まず南の 8 区では、40 枚以上の水田（付―２）が検出され、畦畔は幅約 30ｃｍ、高さは高いところで 5ｃｍ程度ですがそこには水口が付いています。水田の規模は 3 ㎡～25 ㎡、平均的には 10 ㎡ほどと報告されており、小区画水田といった前期水田の特徴がみえます。また、足跡と稲株の痕跡も多数見つかっており、乾田でなく湿田であったことがわかります。

その北側のエリア（7 区）でも小区画水田が検出されていますが、残存状態が悪いので不確かな部分もある一方、そこからは石包丁の出土もありさらに奈良県では初例の護岸を含む制水施設と考えられる灌漑施設（多量の杭と矢板状遺構）も検出されています。

また、北７区北端部には、縄文晩期の土器が集中して出土しており、既にその時期には安定的な地形に変化し積極的な活動域となっていたことが分ります。

なお、9 区では、弥生前期の水路も見つかっています。

萩之本遺跡は、周辺の前期水田址と同じ堪水の確保が容易な扇状地形の緩傾斜を利用した小規模の水田経営であったことがわかります。その方式は、簡便な稲作技術であるとともに労働投下量も少なくてすむことから、在地の縄文人にとっては多様な生業システムの一部に組み込むことは容易であったと思えます。

編集委員

井上知章　植田洋高　大森初美

谷口敬子　花坂志郎　福島道昭

平成27年度　総合的な学習支援の年間予定表

日　付	学校	内容	予備日
5月 1日(金)	北小	ミュウジアム見学、勾玉つくり	
5月 8日（金）	南小	火熾し、炊飯	5月13日(水)
5月15日（金）	北小	火熾し、炊飯	5月20日(水)
5月21日（木）	田原本小	ミュウジアム見学	
5月29日（金）	平野小	勾玉つくり	
6月 4日（水）	田小	火熾し、炊飯	6月5日(金)
6月19日(金)	田原本小	勾玉つくり	
6月26日(金)	平野小	土器つくり	
7月 2日（木）	東小	ミュウジアム見学、勾玉つくり	
7月10日（金）	南小	勾玉つくり	
7月15日（水）	北小	土器つくり	
10月 1日(木)	東小	土器つくり	
10月 2日（金）	北小	土器野焼き	10月9日(金)
10月 6日（火）	平野小	土器野焼き	
10月22日(木)	平野小	火熾し、炊飯	
11月 5日（木）	東小	土器野焼き	
11月19日(水)	東小	火熾し、炊飯	

2015年　「ものつくり教室」予定表

日　付	内　容	日　付	内　容
4月 8日（水）	学校支援勾玉石材カット	9月10日（水）	休
4月22日（水）	青銅溶融実験	9月23日（水）	しいのみ
5月13日（水）	学校支援勾玉カット・火熾し整備	9月28日（月）	鋳型焼成？
5月27日（水）	学校支援勾玉カット・火熾し整備	10月 7日（水）	穂苅
6月10日（水）	下之郷遺跡他	10月21日（水）	マテバシー
6月24日（水）	藍染	10月28日（水）	文化祭準備・
7月 8日（水）	苧麻刈り取り	11月 1日（日）	文化祭
7月 9日（木）	苧引き	11月11日（水）	青銅器・鋳込み
7月22日（水）	石器造り・粘板岩？輪状模造り	11月25日（水）	脱穀・団栗味噌作り
8月12日（水）	休	12月 9日（水）	遺跡清掃・慰労会
8月22日（土）	土器用・土作り	12月26日（土）	注連縄作り
8月25日～28日	土器つくり・鋳型作り		

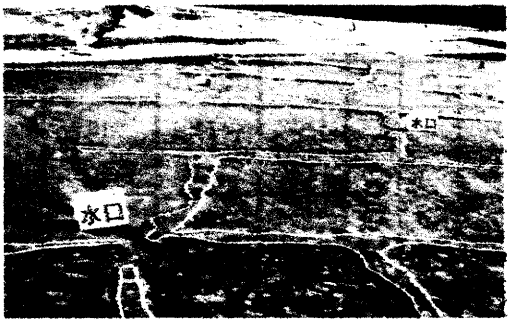
活動内容・日程等は都合により変更があります。支援隊の携帯電話にご照会ください。

◎ 平成27年度目標：青銅器鋳造

地形一覧表

遺跡名	地形	主な遺構（弥生期）			中期	後期	古墳期	標高	比高差
郡山城下層	丘陵(西)	竪穴住居				○	○	64～67	11
六条山	丘陵(西)	竪穴住居				○		100	25
外川	丘陵(西)					○		70	7
一ノ谷	丘陵(西)	竪穴住居				○		90～99	15
田中垣内	扇状地	竪穴住居	溝（環濠）	井戸・土坑		○	○	60	
古屋敷	扇状地	溝			○			59	
万願寺	扇状地	竪穴住居	溝			○	○	57	
西田中	丘陵（矢）	竪穴住居	貯水穴	土坑・溝	○	○	○	65～68	
慈光院裏山	丘陵（矢）	竪穴住居						65	7
小泉(調錬場)	丘陵（矢）	方形周溝墓			○			60～70	5
小泉(狐塚)	丘陵（矢）	土器溜り						73	10
小泉(大塚)	丘陵（矢）	竪穴住居				○	○	75	20
六道山	丘陵（矢）	包含層			○	○	○	60	5
菩提山	丘陵（矢）	竪穴住居		土坑	○	○	○	64	7
原　田	扇状地	溝			○	○	○	50	
三井岡原	丘陵（矢）	竪穴住居	溝・土坑・ピット		○	○		58～63	10
西里	扇状地	方形周溝墓			○	○	○	60	

唐古･鍵遺跡第 23 次調査 1 号人骨



水田部分拡大写真

萩之本遺跡 水田跡全景